20251102　・降誕前第８主日・聖徒の日（永眠者記念日）礼拝

司式：大谷昌恵

奏楽：山田絵里

前奏：「われ心よりこがれ望む」（J.ブラームス）

招詞：わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある。（詩 124.8）

讃美歌：385「花彩る春を」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①詩編 103.14-22

14 主はわたしたちを/どのように造るべきか知っておられた。わたしたちが塵にすぎないことを/御心に留めておられる。
15 人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。
16 風がその上に吹けば、消えうせ/生えていた所を知る者もなくなる。
17 主の慈しみは世々とこしえに/主を畏れる人の上にあり/恵みの御業は子らの子らに
18 主の契約を守る人/命令を心に留めて行う人に及ぶ。
19 主は天に御座を固く据え/主権をもってすべてを統治される。
20 御使いたちよ、主をたたえよ/主の語られる声を聞き/御言葉を成し遂げるものよ/力ある勇士たちよ。
21 主の万軍よ、主をたたえよ/御もとに仕え、御旨を果たすものよ。
22 主に造られたものはすべて、主をたたえよ/主の統治されるところの、どこにあっても。わたしの魂よ、主をたたえよ。

朗読聖書②マタイによる福音書 8:23-27

◆嵐を静める
23 イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。
24 そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。
25 弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。
26 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凪になった。
27 人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。

祈祷

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。主日のこの朝、あなたは、私たち夫々に新しい命を与え、礼拝する民の一人ひとりとして、この場に招いてくださいました。今日も、こうして、御前に賛美と祈りをお献げし、御言葉を与えられる喜びを備えて下さった神さまに心からの感謝をお献げ致します。

過ぐる一週間を省みた時、あなたへと心を向けることを忘れ、隣人を傷つけ、多くの過ちを犯してしまったことを懺悔致します。自らが犯した罪を思うと、その罪の重さに身もすくむ思いが致しますが、それでもあなたは私たちを愛し、今日もこうして御前へと招いてくださいました。どうかこの場所から始まる一週間の歩みも、あなたへと立ち返ることを忘れずに、日々を過ごすことができますように私たちをお守りください。

神さま、本日は聖徒の日、永眠者記念日として、この礼拝をお献げしています。私たちは、多くの信仰の先達の歩みを思いつつ、この時を過ごしております。この信濃町教会も創立から 101 年目を迎えましたが、その歩みは決して常に平坦だったわけではありません。様々な困難な時があったことと思います。しかし、その一つひとつを先達たちは、神さまへの祈りをもって乗り越え、この教会の歩みを今日へと伝えてくださいました。そのことに心から感謝すると共に、私たちも、ここから先、後の世代へと、しっかりと信仰を継承して行けるように、先達たちの歩みに倣って進んでいきたいと願います。先に神さまの所へ召された方々への想いを心に抱きつつ、この地上での礼拝が天上での礼拝と主によって一つとされていることを覚え感謝すると共に、世々の聖徒たちと共に限りなく大いなる聖名を賛美し褒め称えます。

神さま、本日は佃雅之牧師が御言葉の取次ぎをしてくださいます。どうぞ佃牧師が大胆に豊かに御言葉を語ることができますよう聖霊を豊かにお注ぎください。そして聴く私たち一人ひとりの心を開き、御言葉をしっかりと受け止めることができるように整えてください。

今日この場に来たくとも来ることができない友、またオンラインでの礼拝にも与ることができない友がいます。心と体に不調を覚える方、様々な重荷を負っている方、その方に寄り添う方がいます。どうか、そのような方々の上にも、私たちに注がれているものと同じ恵みと祝福とをお注ぎください。そしてまた、共に礼拝をお献げできる時までの歩みをお守りください。

今日日本中、世界中で献げられる礼拝の上に、あなたからの豊かな祝福がありますように。この祈り、全てのものの救い主なる、主イエス・キリストの聖名を通して、御前にお献げを致します。アーメン。

合唱：「この世にあかしたてて」（聖歌隊）

説教　「嵐の中にも共におられる主」　　佃　雅之

朗読されました詩編 103 篇で詩人はこう語ります。

主はわたしたちを どのように造るべきか知っておられた。わたしたちが塵にすぎないことを 御心に留めておられる。

「塵にすぎない」という言葉は“人間の小ささ、弱さ、命の儚さ”を表しています。けれども、その小さな存在である私たちを、神は「御心に留めておられる」のです。「留めておられる」〈ゼーケル（זֵכֶר）〉というのは、「覚えている」、「記憶する」、あるいは、「思い起こす」という意味の言葉です。神は私たちを決して忘れてしまうことがありません。私たち一人ひとりは「塵」に過ぎない存在ですが、どんなに小さく弱く見えても、神の目には掛替えのない存在なのです。この言葉には、神の深い愛と慰めが込められています。誰もが、自分の人生の歩みを振り返るなら過ちの連続かもしれません。神は、弱く、迷い易く、時に信仰が揺らぐこともある私たちの全てをご存知の上で愛してくださいます。小さな存在である私たちを責めることなく、むしろその在りのままを深く理解してくださるのです。

私たちの地上の生涯は限られています。けれども神は、その限りある命を尊いものとみてくださる。私たちの弱さも老いも死も、神の眼差しの外にあるものは一つもありません。そして地上での歩みを終える時、私たちが塵に還るその時を、神は全てが終わる悲しみとしてではなく、ご自分の御手に迎え入れる道としてくださるのです。詩人はこう続けます。

人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。風がその上に吹けば、消えうせ/生えていた所を知る者もなくなる。

人の生涯は野の花のように美しく咲くことがあっても、やがて風に吹かれ、その姿は見えなくなっていきます。私たちが愛する方々も、この地上で「**野の花のように咲**」き、夫々の生涯を終え、御許へと召されました。今朝、私たちは聖徒の日、永眠者記念日礼拝を献げています。11月第一日曜日は天に召された方々の歩みを覚え、その生涯を導いてくださった神の恵みを思い起こす時です。その恵みの歩みを思い起こす時、私たちの上に溢れるのは深い感謝です。

ここで昨年の永眠者記念礼拝以降に逝去された兄弟姉妹の名を呼びたいと思います。

中原昭二郎さん	2024年12月13日	逝去
塩田　武子さん	2025年 1月 5日	逝去
真柳　和俊さん	5月 5日	逝去
斉藤　和子さん	7月30日	逝去
西山　光生さん	8月20日	逝去
大野八重子さん	10月24日	逝去

以上、6名の方々です。

この礼拝を通して、先に召された方々が、その生涯を委ねられた神への信頼を私たちも新たにしたいと思います。

信仰に生きるということは、キリストに従い、キリストと共に歩むことを意味します。今日は、『**マタイによる福音書**』が読まれました。福音書記者マタイは、キリストの弟子とはどのようなものかを、「**イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った**」という一言に込めています。「**従う**」という言葉〈**アコローセオー**（ἀκολουθέω）〉は、本来、「**後からついて行く**」という意味を持っています。けれども聖書が語る「**従う**」とは、ただ「**後ろを歩く**」だけではありません。自分の思いや拘りを手放して、キリストに全てを委ねて、キリストと共に生きる道を選ぶことが、聖書の語る「**従う**」という言葉の意味です。

昔から、教会はよく舟に喩えられてきました。私たちが日曜日毎に礼拝堂に集うことは、謂わば、キリストと共に同じ舟に乗り、舟旅をする経験であります。キリストが乗られていても教会という舟は大きく揺り動きます。それは“**舟に乗っている私たち一人ひとりの弱さが表れているのだ**”と言う人もいます。そもそも、教会は決して強いものではありません。弱く儚い「**塵**」にすぎないような人間が集まって、決して頑丈ではない小さな舟に乗っている、それが教会生活であり礼拝の時なのです。

この場面で弟子たちは、今の私たちと同じように、キリストと共に舟に乗っていました。その途中で、突然、「**激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった**」のです。キリストと共に在る教会も平和と幸福に満ちた別世界ではありません。そこにはこの世の嵐が襲い掛かってくることもあります。「**波にのまれそうになった**」弟子たちは、「**主よ、助けてください。おぼれそうです**」と叫びました。人の力ではどうにもならない現実、私たちの人生も、時として嵐の中を行く舟に似ています。日々の労苦、争い、病や老い、そして何よりも、愛する人との別れ、理解できない試練、信仰を持って歩んでいても、様々な恐れに襲われることがあります。人を恐れ、不幸を恐れ、生きることにも、死ぬことにも不安を抱いてしまうのが私たちです。祈っても答えが見えず、まるで神が沈黙しておられるかのように思える時もあります。現実の世界にある困難や苦しみは、私たちの力など到底及ばない程大きく感じられることがあるものです。“**神はなぜ、私をこのような苦しみに合わせるのか。そして、この痛みはいつまで続くのか。主よ、助けてください**”と叫ばずにはいられない時が、誰の人生にもあるでしょう。まさにこの時の弟子たちがそうでした。しかし、その時、キリストはなんと舟の中で「**眠っておられた**」のです。

「**おぼれそうです**」という弟子たちの叫びの言葉〈**アポッリューミ**（ἀπόλλυμι）〉は、「**滅びます**」、「**死んでしまいます**」とも訳すことのできるものです。私たちは自分が滅びてしまうという恐怖を肉体の死の時だけではなく、自分の働きで築き上げてきた信頼が傷つき、守られていた生活が失われそうな時や、家族や愛する人を失いそうな時にも覚えることがあります。まるで自分が滅びへと引きずり込まれそうな恐怖です。不安なとき、辛いとき、寂しいとき、悲しいとき、相応しい助けが見つからなければ、私たちは叫びたくなるでしょう。“**神よ、なぜこんなことが、なぜこんな時にあなたは眠っておられるのか、神よ、あなたは何故何もなさらないのか**”と叫びたくなります。滅びの危機に直面した時、信仰の有る無しに拘わらず、あらゆる人間が叫ぶ根源的な叫びです。教会も同様です。猛烈な風が吹き荒れ、大きな波が教会を襲うとき、知恵ある指導者も、豊富な経験者も、頼みとしてきた伝統や組織も、その力を充分に発揮することができなくなることがあります。その時、舟は沈み行くかのように思います。

けれども、嵐の中で私たちが見るべきものは舟の中におられるキリストの存在です。「**眠っておられ**」る、その静かな存在の中に、私たちは信頼をおくことが求められています。どんな恐怖の中でも、どんな苦しみの中でも、キリストは共に居られる。キリストが「**起き上がって**」くださる時を信じて待つことです。それが私たちの希望であり力なのです。

25節に「**弟子たちは近寄って**」とあります。弟子たちは嵐の中で恐れながらもキリストのもとに近づきました。この弟子たちの姿は、日曜日毎に教会に集い、目には見えない主を礼拝している教会の姿です。キリストは「**起き上がって風と湖を叱り**」、全てを鎮められました。私たちに嵐を静める力はありません。けれども、神にできないことは何一つありません。キリストには全てを支配し、全ての人を救に導く力があるのです。「**なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。**」とキリストは彼らに語りかけられます。この言葉は弟子たちを叱りつけるためのものではありません。「**なぜ怖がるのか**」というのは、“**怖がる必要はない**”と言っているのです。むしろ、弟子たちを励まし、父なる神を信じる心を思い出させるための暖かい呼びかけなのです。決して責めるのではなく、信じる心を思い起こさせ、勇気づけるための呼びかけであります。キリストは弟子たちの信仰の薄さを叱ったのではなく、むしろ、“**あなた方は決して一人ではない**”ということを示されました。確かに、この時の弟子たちは、まだ信仰の弱さを抱えていました。決して立派な信仰を持っていた人は一人もいません。それでも弟子たちはこのとき“**必ずキリストが助けてくださる、キリストだけが救い出す力を持っておられる**”と信じていたのです。たとえ信仰が小さく恐れ迷うことがあっても、揺れ動いても、主に助けを求めるなら主は必ず手を差し伸べてくださいます。嵐の中にあってもキリストが眠っておられたのは、父なる神への深い信頼があるからです。

舟に嵐が襲いかかる時、私たちの本当の姿が露わにされます。“**嵐の中でも神は共に居られる、今も生きて働いておられる**”と信頼して、心を鎮め、神の時を待つことができるか。それとも自分の力だけでなんとかしようとして不安に呑み込まれてしまうのか、その時、私たちがどのように生きるのかが問われます。自分でなんとかしようとする時、その時、私たちは自分ばかりを見て、キリストから目を逸らしてしまう危険があるのです。嵐の中で

私たちが見るべきものはキリストなのです。何も仰らないこのお方の下で鎮まることです。大切なのは、このお方をただ見つめることなのです。

この物語は、死や恐れの混乱の中にも主が共にいて下さることを示しています。それは深い愛と憐れみの徴です。神の愛と憐れみは、キリストに従う信仰を持つ人だけに限られているものでしょうか。決してそんなことはありません。神は全ての人を救うために、独り子イエス・キリストを十字架に架け、そして復活させてくださいました。この世界で神の救いの恵みと無関係な人はただの一人も居ないのです。

今日読まれました詩編の17節にはこう書かれています。

しかし、主の慈しみはとこしえからとこしえまで、主を畏れる者の上にある。

「**とこしえからとこしえまで**」ということは、“**神の憐れみは永遠である**”ということです。キリストに従い、教会という舟に乗り込まれた先に天に召された方々は、今もこの“**とこしえの憐れみ**”の中に生かされています。死を超えて途切れることなく続く神の愛の中で安らぎ光に包まれています。そして、この“**神の憐れみは一代で終るものではない**”と詩人は歌います。主の恵みはその契約を守る者の子らの子らにまで及ぶのです。

天に召された方々の信仰と祈りは今も私たちの歩みを支え導いています。私たちが今日、ここに集っているのは、先に召された方々の祈りが支えた信仰の実りです。彼らの生涯を通して神の憐れみが私たちにも届いています。永眠者記念日とは神の救いの約束が今も続いていることを確かめる日でもあります。天に召された方々も、地上での歩みの中では様々な嵐を乗り越えながら生きて来られました。激しい嵐の只中になっても主は一瞬たりとも私たちから離れず、常に傍にいて守ってくださったのです。嵐を沈められた主が、今も同じ御手をもって、亡き方々を、そして生かされている私たちをも包み込んでおられます。弟子たちが、また信仰の先達たちが従ったように、私たちも主に従う者として、この朝、教会に呼び集められています。私たちにできることは、共に礼拝を献げ、“**主よ、助けてください**”と祈り願うことです。その時、主は私たちを助けてくださいます。

私たちは皆、やがて地上を去ります。しかし、神は、命の終わりを超えてなお、私たちを導いてくださいます。今日、私たちは改めて、主に従い、主の平安に包まれて歩む者とされたいと願います。

お祈りを致します。

聖なる神さま、御言葉を通して私たちの愛する家族、信仰の先達に注がれたあなたの恵みが、今もなお、私たちに注がれていることを深く知ることができました。主よ、どうか、嵐に揺れ動く私たちに、主イエス・キリストが十字架の死と復活によって、全てに勝利された方であることを覚えさせてください。また、その計り知れない御力によって、今、悲しみの中にある方々を慰め、支えてくださいますように。

先に召された方々をあなたの憐みの内に覚え、今、地上を歩む私たちにも恐れを超える平安をお与えください。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:510「主よ、終わりまで」

聖晩餐　ニカイア・コンスタンティノポリス信条の告白　和解の挨拶

讃美歌:81「主の食卓を囲み」

献金・感謝(長原光)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

全能の父にして永遠を支配し給う主イエス・キリストの父なる神さま、今朝、私たちを御前に招き、聖徒の日・永眠者記念日の礼拝を兄弟姉妹と共にあなたに献げることが許されまして感謝致します。

去る10月31日は宗教改革記念日でした。私たちの教会も、初代教会からの信仰の系譜に繋がる改革派教会に連なっています。信仰の先達たちは、そのものをまだ与えられずにおりましたけれども、遥かにそれを望み見て喜び、地上の歩みを為したと書いてあります。私たちは空の星のように、このような夥しい証人に囲まれています。どうか、私たちの地上の歩みがどんなものであれ、あなたが、一人ひとりに目を注いでくださいますことを覚え感謝致します。

あなたは万物を造られた御子イエス・キリストの生涯と十字架とその復活において、死からこそ始まる新しい命を私たちにお示しくださいました。また、その御国に私たちを呼んでいてくださいます。

どうか私たちが、この地上の歩みにおいては寄留人であり、私たちの御国は、私たちの国籍はあなたの御国にあることを覚えつつ歩ませてください。今朝、礼拝に共々に与れない兄弟姉妹を覚えます。どうかあなたがその一人ひとりに、私たち以上の恵みを賜ってくださいますように。

只今、あなたから与えられた宝の一部を私たちの感謝と献身の徴としてお献げ致します。どうかあなたの都の御用のためにお使いくださいますように。

主イエス・キリストが地上の歩みを為さった時に教えてくださいました「**主の祈り**」をもって、この新しいひと回り歩みを始めさせてください。「**主の祈り**」…**アーメン。**

派遣:讃美歌90「主よ、来たり、祝したまえ」

派遣と祝福〈司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。　会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。〉

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)週報掲載、教会への献金他新規振込先の案内、(2)子供と一緒にクリスマスリース作る会の申し込み案内、締め切り11/16(日)。

後奏:「おお世よ、われ汝に別れを告げん」(J.ブラームス)